

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21830057

研究課題名（和文） 社会的地位選好論の動学分析と実証研究

研究課題名（英文） Theoretical and Empirical Analyses on Social Preference

研究代表者

山田 克宣 (YAMADA KATSUNORI)

大阪大学・社会経済研究所・特任研究員

研究者番号：80533603

研究成果の概要（和文）：インターネットで大規模調査を行い、社会的効用のパラメーターを仮想選択実験から推計した。特に、比較対象が変化したときに社会的効用の効用関数パラメーターがどのように変化するのか、また、被験者の個人属性によって効用関数のパラメーターがどのように違うのかを明らかにすることができた。同じ実験から、日本においては「イースターリンの逆説」が成立するほど、社会的効用の平均的な効果は大きくないことが発見された。

研究成果の概要（英文）：I conducted an internet-based large-scale survey of hypothetical choice experiment on the relative utility hypothesis which posits that human being make decisions taking into account not only their own conditions but also consequences of their behavior on social interactions. I showed that not only the intensity but also the distribution of relative utility are different across specific comparison benchmarks, and across types of reference groups people are facing in the experiments. The relative utility effect among Japanese respondents is found to be not as strong as can validate the Easterlin paradox.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,070,000	321,000	1,391,000
2010年度	510,000	153,000	663,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,580,000	474,000	2,054,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：応用経済学

キーワード：社会的地位選好・社会的効用・イースターリンの逆説・離散選択実験

## 1. 研究開始当初の背景

これまで社会的効用の効用関数パラメータは、「幸福の経済学」の手法で推計されていた。しかし、主観的満足度という特殊なデータを用いるため、推計されたパラメータを経済学の理論分析で用いることの是非については多くの批判的な議論がなされていた。

## 2. 研究の目的

理論研究で用いることの出来る、社会的効用の効用関数パラメータの推計を行うことが目的であった。そのため、理論と整合的な実験枠組みを提唱する必要があり、それを行った。具体的には、社会的効用効果を含んだ離散選択実験系を構築し、被験者の選択パターンから、最尤法を用いてパラメータを推計した。

## 3. 研究の方法

仮想的離散選択実験で、効用関数のパラメータを推計した。これにより、「幸福の経済学」で用いられる主観的満足度という情報がない状態で、直接効用関数の形状を推計することが可能となった。この様にして得られた効用関数パラメータは、理論分析においてモデルの含意を検討するときに利用することが可能である。また、新しい実験パラダイムで得られたパラメータの性質と、従前の主観的満足度を用いた社会的効用効果の推計における結果を比較するテストも行った。

## 4. 研究成果

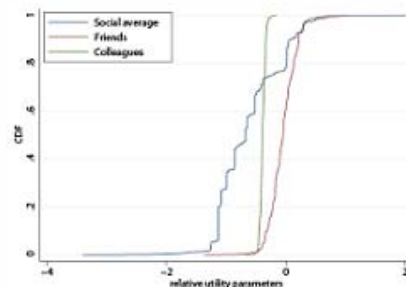
まず、主観的満足度のデータを用いる従前の方法で、日本における社会的効用の強さを推計した（下記、主な研究業績①）：

幸福の経済学の文脈でよく知られた「イースターリンの逆説」、一賃金や所得の上昇が主観的に報告された満足度の上昇を伴わない、という観察-を国際経済労働研究所が提供する固有データを利用して再検証した。自己賃金と参照群賃金、及び様々な個人属性を主観的幸福度に回帰する“幸福度の回帰分析”から得られた結論は、日本経済において、他者の賃金に関する負の相対効用（妬み）が存在するということである。ただし、その妬みの効果はイースターリンの逆説を正当化するほど強いものではなく、自己賃金が主観的満足度に与えるプラスの影響に対して、約半分の影響しかもたない。この様な新しい結果が得られた理由として、本研究の幸福度の回帰分析においては、参照群の賃金水準の「主観的かつ基数的」な情報が利用可能であったことが重要である。これは幸福の経済学の先行研究では全く利用できなかったものである。サーベイによって被験者から引き出された主観的な参照群賃金を「真の参照群賃金」と捉えつつ、「真の参照群賃金」情報が利用可能でないときに、他の代理変数を用いた相対効用仮説の回帰分析でうまれるバイアスについても分析した。さらに本研究では、古典的な測定誤差モデルを拡張し、測定誤差を含む2種類の参照群賃金の代理変数を用いた簡便な操作変数法によって、回帰係数のバイアスがどの様に除去できるか明らかにした。そして、実際に回帰分析を行い、その結果と「真の参照群賃金」から得られた結果を比較することで、先行研究の方法論を批判的に検討した。

次に、仮想離散選択実験の結果から、日本における社会的効用の効用関数パラメーターの分布を求めた（下記、主な研究業績②）：

社会的効用仮説について仮想的離散選択実験をもとに分析をおこった。主たる目的は相対効用仮説の検証で支配的な幸福の経済学（及び、本研究と同様に補助的な分析方法と考えられる金銭報酬つき選択実験と、神経科学実験）の手法上の問題点を克服する分析を行うことで、先行研究の発見を再検証、補強することである。幸福の経済学との重要な手法上の違いは、（１）批判の多い主観的幸福度のデータを用いる必要がないこと、（２）被験者にとって、参照群の性質や、賃金水準、さらには自分とライバルの賃金格差が目に見える形で提示された状況で実験が行われるので、（殆どの）幸福の経済学分析の様に参照群所得の代理変数を人為的に作成する必要がなく、相対効用を検証する実証分析としては、より信頼できるデータを扱えること、の２点である。サンプルが日本の人口統計的な特徴をとらえるようにデザインされた大規模インターネット調査の結果より、被験者は日本の平均賃金水準の上昇に対して、負の相対効用（妬み）をもつことが確認された。ただし、その妬みの効果はイースターリンの逆説を正当化するほど強いものではなく、自己賃金が主観的満足度に与えるプラスの影響に対して、半分程度の負の影響しかもたないことが示された。これは上述の幸福の経済学分析の結果を補強するものである。本研究が明らかにしたこととの他の例として、対象群がより高学歴であると妬みの効果が強くなる一方、年齢が高い他者との比較においては、利他的な相対効用が生まれやすくなること、または男性にとっても女性にとっても、男性がより強い妬みの対象となることが挙げられる。さらに、

比較ベンチマークが友人である被験者にとって、友人というライバルに対する比較意識の分散が非常に大きく、約３割の被験者が利他的な相対効用をもつ一方、比較ベンチマークが仕事関係者である被験者にとって、仕事関係者というライバルに対して「一様に」妬みを感じていることを明らかにした。これは、被験者にとってのライバルの内観と、実際に誰と比較するのかということが、ともに相対効用の強度や方向性に影響を与えることを示しており、社会の平均賃金と満足度の関係を捉えるイースターリンの逆説が、「強い単純化」のもとで生まれていることを示している。最後に、仮想離散選択実験の結果から、日本における社会的効用の効用関数パラメーターの分布を推計することができた。



図は、離散選択実験によって求められた、社会的効用パラメーターの分布である。参照相手が異なると社会的効用の効果も変化し、例として「友人」との所得の比較においては、約３割の被験者が利他的な効用パラメーターをもつことが分かった。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① de la Garza, A., G. Mastrobuoni, A.

Sannabe, and K. Yamada, The Relative Utility Hypothesis With and Without Self-reported Reference Wages, ISER Discussion Papers 798, Osaka University, 査読無, 2010, 1-34.

- ② Yamada, K. and M. Sato, The Easterlin Paradox and Another Anatomy of Income Comparisons: Evidence from Hypothetical Choice Experiments, ISER Discussion Papers 795, Osaka University, 査読無, 2010, 1-40.
- ③ Arato, H., and K. Yamada, Valuing Japanese Corporations: A New Perspective on Japan's Stock Market "Bubble" of the 1980s, ISER Discussion Papers 772, Osaka University, 査読無, 2010, 1-30.
- ④ Yamada, K., M. Sato, and Y. Nakamoto, Measurement of Social Preference from Utility-Based Choice Experiments, ISER Discussion Papers 759, Osaka University, 査読無, 2009, 1-45.

[学会発表] (計1件)

- ① Yamada, K., M. Sato, The Easterlin Paradox and Another Anatomy of Income Comparisons: Evidence from Hypothetical Choice Experiments, The 2010 International Symposium on Econometric Theory and Applications, 2010.5.1, Singapore Management University.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山田 克宣 (YAMADA KATSUNORI)

大阪大学・社会経済研究所・特任研究員

研究者番号：80533603